

「英語教育」はいかにして 「教育」たりうるか？

三浦 孝 Miura Takashi
(静岡大学名誉教授)

◇はじめに、「教育」とは

「教育」とは、潜在的な発達の可能態として生まれてくる子供に働きかけて、その可能態を現実態にしていく営みであり、同時に社会の文化や言語や生活様式や決まりなどを、新たに社会に加わってくる子供たちに伝え、彼らを社会の成員にしていく営みである（『日本大百科全書』）。

教育が単なる技能講習と異なるのは、後者がスキルの伝授のみを目的とするのに対して、前者は子供の全人的発達と人類の理想の実現を目指した人間形成の営みだという点である。

それでは、英語「教育」はいかなる意味において、生徒の人間形成の営みとなりうるのだろうか、本稿はその概観を述べたものである。

なお考察にあたって、下記の点をおことわりしておきたい。

- (1) 英語教育は外国語教育の一環であり、ここで述べる要素もほとんどが外国語教育全般にあてはまるものである。
- (2) 本稿は、中学・高校での普通の英語授業や小学校外国語活動において、どのような人間形成的要素が内在するかを考察したものであって、英語教育をどのような外的目的に利用するかを考察したものではない。

◇英語教育の人間形成的要素とは

英語教育が、英語コミュニケーション力の養成を第一目標としながら、その授業を通してどのような人間形成的要素を内包するかについては、次

のような要素が指摘されてきている。

(a) 異文化理解・異文化適応力の養成

今から50年以上前の話だが、ヨーロッパを旅行中のロシア人が、ただ単に発音が生意気だという理由で、ロシア語のわからないタクシー運転手に殴打される事件があった。異文化適応力を欠いた者同士の出会いは、このような不幸な誤解による衝突を生みかねない。母語と異なる発音や文構造、表現、談話構造に接すること自体が、異文化体験であり、その体験を通じて異質な文化に対する tolerance (耐性) が養われる。また教材の英文を通して、自分の文化と異なる思考様式や生活様式に触れることで、さらに異文化理解が養われる。

(b) 授業中の活動を通じての豊かな社会性育成

現代の英語授業では、ペアワークやグループワーク、インタビューやプレゼンテーション、タスク活動など、生徒が小集団で任務を分担して運営する授業活動の活用が推奨されている。こうした活動を通して、豊かな社会性（自己受容・共感的理解・人間関係作り・initiative・risk taking等）が涵養されてゆく（三浦, 2006）。産業革命以来、機械が肉体労働で、コンピューターが事務労働で人間に取って代わってきた。将来は人工知能が頭脳労働で人間に取って代わってゆくことだろう。そんな流れの中で、豊かな社会性はますます人間固有の力として重要性を増してゆくだろう。

ただし、生徒を小集団に分けただけで、こうしたコミュニケーション活動や良好な協力関係が自然に成立するわけではない。中には、小集団活動を苦痛に感じたり、時間の無駄と考える生徒もい

る。教師は、協同説明すると共に、

(c) 世界的視野の

教科書の英文に

争・人権・飢餓・

諸問題と、その解

されている。こう

たちは視野を世界

なお、これにはは

扱われていること

科書が英語教育を

れてはならない。

にある英語教師や

が使用する教科書

定教科書全般の内

てはならない。

(d) 言語の仕組み

英語に特有の言

言語文化を反映し

とによって、英語

ことができる。下

ある。

ア) 徹底した言

の “I am very hap

の “It was nice ta

は相手はこちらに

を明白に言葉で表

イ) [Why? — B

タラクションで日

cause] の問答であ

ことのある人は経験

見を言えば教師は

で反応してくる。英

の理由をしっかりと

同調した振りをする

るからである。

◎「生き方が見えてくる高校」と
めた共同著書「高校英語
的会話中心の授業を超えて」

る。教師は、協同的学習の意義を生徒に繰り返し説明すると共に、協同的学習と個別学習の使い分けを工夫し、拒否反応を示す生徒の気持ちに寄り添って一緒に打開策を模索し、編成したペアやグループを導き高める努力を継続することが必要である(中嶋, 2000)。小集団でのコミュニケーション活動は特効薬ではなく、常にチャレンジと言える。

(c) 世界的視野の広がり

教科書の英文には、地球環境問題・戦争や紛争・人権・飢餓・貧困・病気など、世界的規模の諸問題と、その解決に奮闘する人々の努力が紹介されている。こうした英文に触れることで、生徒たちは視野を世界に広げてゆくことができる。

なお、これには教科書が見識をもって編集、採択されていることが大前提である。戦前の英語教科書が英語教育を戦争美化の道具にしたことを忘れてはならない。なによりも、教科書を使う立場にある英語教師や英語教育の諸学会は、自分たちが使用する教科書のみならず、出版されている検定教科書全般の内容について、批判的検討を怠ってはならない。

(d) 言語の仕組みに顕れた対人交渉文化の学習

英語に特有の言い回しや論述構成は、英語圏の言語文化を反映しており、その深層を理解することによって、英語圏の対人交渉の原理を学習することができる。下記(ア)～(オ)はその一例である。

ア) 徹底した言語表明の尊重：相手に会った時の“I am very happy to meet you.”や、別れ際の“It was nice talking with you.”など、英語は相手がこちらにとって好ましい存在であることを明白に言葉で表明し合う文化を反映している。

イ) [Why? — Because] の常用：英語のインタラクションで日常的なのが、[Why? — Because] の問答である。英語圏で語学研修をしたことのある人は経験したであろうが、こちらが意見を言えば教師はまず“Why do you think so?”で反応してくる。英語文化では、互いの主張とその理由をしっかりと言語化して伝え合うことは、同調した振りをするよりも礼儀正しいこととされるからである。

ウ) 水平な人間関係におけるポライトネス(丁寧さ)：英語には、自分を低め・相手を高めることによって敬意を表す日本の敬語にあたる文化は存在しない。しかし、対等な関係におけるポライトネスは厳然として存在する。それは、①決定権を相手に譲る、②相手がこちらの誘いや依頼を断りやすくする、③用件を婉曲に表現する、という原理で成り立っている(鶴田他, 1998)。たとえば“May I ...?”という疑問文を教える際には、それが、「依頼を承諾するか否かの決定権を相手に委ねる」という意味で、非常に丁寧な許可の求め方であるという文化を同時に教えたい。

エ) 人間関係の positive tone：日本語では相手に何かをしてもらった時には「ご迷惑をおかけしてすみません」と謝る。「自分は相手にとって negative (迷惑) な存在だ」という文化的前提がそこにある。一方、英語では“*Oh, this is wonderful! You are a great help!*”のように言って感謝する。「自分と相手が、お互いにとってありがたい (positive) 存在だ」という文化的前提がそこにある(木村, 2007)。

オ) 英語の論述構成に顕れた、民主社会を支える言語技術 (language art) (三森, 1996)：英語では、根拠を伴って論理的に整然と、言葉を尽くして相手に用件を伝えることが、話し手・書き手の責任とされている。そのために、「topic sentence + support」という段落構造、general → specific という配列、より良い結論を導き出すための mind (知性・意見) の協同作業としての discussion の尊重、その協同作業のためのマナーとしての「mind と heart (感情) の区別」が奨励されている。

(e) 人間性の解放

日本語しか使えない状態は、ドアが1つしかない部屋に譬えられよう。そして外国語が使えるようになることは、もう1つのドアを開けることに譬えられよう。もう1つのドアがあれば、好きな方から出入りができる。必要とあらば自分も外国に行って仕事も生活もしてみせる。こうした自信は、内向きになりがちな日本人に大きな精神的自由をもたらす。

また、外国語で話すこと自体が、母語でのそれ

◎「生き方が見えてくる高校英語授業改革プロジェクト」の成果をまとめた共同著書『高校英語授業を知的にしたい——内容理解・表面的会話中心の授業を超えて』(仮題)を脱稿したところです。(三浦)

とはちがった精神的自由をもたらす。金森(2003)は、小学校で日本語で級友たちとうまくコミュニケーションを取れなかった児童たちが、生き生きと英語で活動している事例を報告している。また筆者の教える学生たちも、英語で名刺交換活動等を行うと、これまで話しかけたことのない学生同士でも非常に生き生きと言葉を交わせるようになる。一人の学生は、学級崩壊した中学校で級友と会話ができなくなってしまった時期に、通っていた英会話塾で他の受講生と英語でなげない会話を行うことが大きな救いになったと述懐している。

(f) 英語教育は他の外国語学習の準備教育である

大多数の生徒にとって、初めて学習する外国語が英語である。中学～高校の英語授業で、外国語の適切な学習方法と必要最低限の文法用語の手ほどきを受け、「自分で自分を教える方略」を発達させることが、将来の他の外国語学習を支える大きな資産となる。英語力は、自販機でジュースを買うように、お金を入れればコトと手に入るようなものではない。たかだか週4～5時間しかない英語授業を、英語習得へとつなげるためには、授業外でその数倍の時間をかけて、あの手この手で自分を教える学習マネジメント力が必要であり、これが習得の成否を左右する。そのマネジメント力を築く手ほどきとなるのが英語授業である。

◇人間形成的要素は、教師が意識していなければ生徒に伝わらない

上述(a)～(f)の人間形成的要素は、英語授業に内包されているとはいっても、放っておいて自動的に学習されるものではない。たとえば先述の“May I ...?”をただ単に「…してもいいですか?」と訳して教えただけでは、内在する英語のポライトネス原理は学習されない。同様に、来客をもてなす際に、飲み物の好みを聞くことが、「相手に決定権を委ねる」という最高のもてなし原理に基づくものであることを知ってはじめて、“Would you like tea or coffee?”の意味深さがわかるのである。

◇人間形成的要素は英語教育の両輪の1つ

いかに英語に流暢でも、相手の文化に無知で、ポライトネスをわきまえず、自分の都合しか目に入らず、相手と言葉のテニスが成立しないような人が、コミュニケーションを取れるはずがない。その意味で、上記の人間形成的要素は、英語コミュニケーション能力の両輪の1つを成すものである。

また、これらの人間形成的要素は、生徒の成長欲求や自己実現欲求に直結するものであるから、触発されれば強い学習動機を引き出し、英語が苦手な生徒も含めて、より前向きに授業に参加する原動力になる。

◇おわりに

以上述べたように英語教育は「異文化理解・異文化適応力・豊かな社会性・世界的視野の広がり・他の外国語学習のモデル」といった、重要な人間形成的要素を内包している。これらは、その無色透明性ゆえに、万人の支持を得やすい徳目である。しかし現実には、これらの要素は英語授業でまだ十分自覚的に取り上げられているとは言えない。これらの人間形成的要素の重要性がもっと理解され、授業で取り上げられ、すべての生徒にこの興味深い情報が伝わるようになった時、日本の英語教育は世界に誇るべき先進的な地球市民教育となりうるだろう。

◆引用文献

- 金森 強 (2003) 『小学校の英語教育』 教育出版
- 木村和美 (2007) 『ポジティブ・イングリッシュのすすめ』 朝日新書
- 三森ゆりか (1996) 『言語技術教育の体系と指導内容』 明治図書
- 鈴木俊彦 (2000) 『DVD-ROM版 スーパーニッポンカ2001』 小学館
- 鶴田庸子, ポール・ロシター, ティム・クルトン (1998) 『英語のソーシャルスキル』 大修館書店
- 中嶋洋一 (2000) 『学習集団をエンパワーする30の技』 明治図書
- 三浦 孝, 池岡 慎, 中嶋洋一 (2006) 『ヒューマンな英語授業がしたい』 研究社

【第1特集】
わたしが授業を通じ
伝えたいこと

未来の子と
無限の

合

小学校英語教育
たちを通して、英
ました。今では、
も英語を聞いたり
書いたりする経験
いることと思いま
れている言葉に興
外の国々に興味・
そして、さらには
者への思いやりを
っていきます。

現在、青山学院
研究センターを中
制英語教育を実践
中等部、高等部ま
児童・生徒の発達
って、学院オリジ
を進めています。
「学習者が授業の
教師は学習者であ
らに寄り添いな
けています。

授業を組み立て
とが、はじめの5
最後の5～10分間
学を箱根駅伝優勝
ように、授業が始
を見せてくれるの
かな」などと思え
るような授業を目

◎幼少時、メキシコに
と出会いを楽しむ。
の文化にもとても興